

# コイヘルペスウイルス(KHV)病発生状況

内水面研究所 宗 達郎

## コイヘルペスウイルス病とは？

コイヘルペスウイルス(KHV)病はマゴイ及びニシキゴイに発生し、死亡率が80%以上になることもある。

病魚は遊泳緩慢になり、餌を食べなくなったりする。また、外観上はエラが褪色して白くなる、エラが腐る、鰭基部が充血して赤くなる、眼球が陥没する等が特徴であるが、明確な症状の見られない場合もある。

発症水温は13~27 で、ウイルスが増殖するのに最適な水温は20~25 である。

日本では病気の予防・まん延防止を目的とする持続的養殖生産確保法の特定疾病に指定されているが、現時点では有効な治療法や予防法は確立されていない。

欧米や東南アジアなどで発生しており、日本では2003年10月に茨城県霞ヶ浦で発生し、その後39都道府県での発生が確認されている。しかし、どのようにして日本に侵入し、広がったかについては良くわかっていない。

熊本県内では2004年6月に球磨川で衰弱していたマゴイに感染が確認されて以降、現在までに11河川で発生している。そこで、発生した河川の発生状況と病魚の症状等について報告する。

## 検査方法

コイのエラ及び腎臓の組織を取り出して、PCR法(コイヘルペスウイルスの遺伝子の特異的に増幅させる方法)により診断した。

## 発生状況

2004年12月末までに河川で発生した場所を図1に、水系別の死亡状況を表1に示す。

河川の初発生時の水温は19.6 で、発生河川でコイが死亡した期間の最高水温は29.4、最低水温は秋に水温が低下した時の13.3であった。

死亡尾数は全河川の合計が約5500尾で、最も多いのが江津湖を含む緑川水系の2,720尾、次いで菊池川水系の994尾、坪井川水系の581尾などとなっている。

## 症状

感染していた25尾(体長22~72cm)のうち、17尾にはエラの褪色(白くなる)、エラの腐敗、エラの粘液の異常分泌、眼球が陥没する、体表や鰭の充血や出血のいずれかの症状が見られた。

一方、8尾については異常が見られなかった。

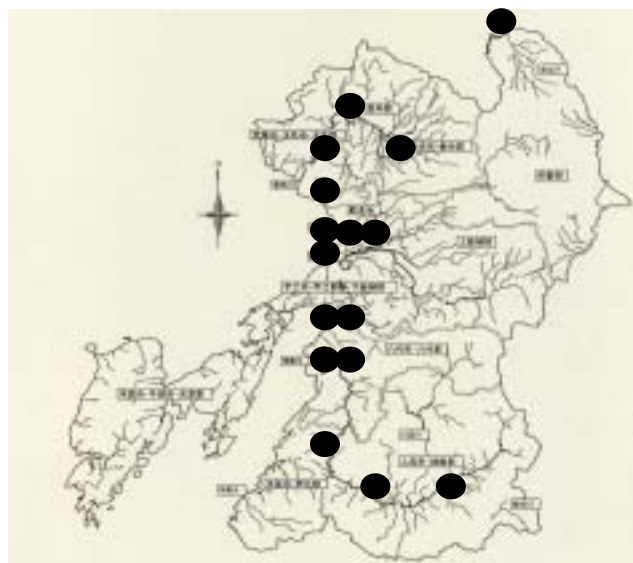


図1 発生箇所位置図

表1 水系別発生状況

水系名	死亡期間	確認死亡尾数
筑後川	6/1~8/6	273尾
球磨川	6/3~7/26	400尾
除川	6/9~6/15	120尾
白川	6/9~7/1	228尾
水無川	6/10~6/12	8尾
緑川	6/11~8/11	2720尾
坪井川	6/14~7/16	581尾
大鞘川	6/16~6/17	60尾
鏡川	6/17	2尾
菊池川	10/4~11/30	994尾
唐人川	11/10~11/19	140尾

## 今後注意すべき点

コイヘルペスウイルス病は水温が13以下と27以上では発症しないとされているが、ウイルスは魚体内で生存可能と思われる。したがって、発生した河川でも全てのコイが死亡したわけではないので、ウイルスは残っていて、適水温期(春や秋)になると再発する可能性がある。

まん延防止のためには河川を含む公共用水面からコイを持ち出して他に放流しないこと、発生した河川では死魚をすみやかに撤去し、処分することが重要である。